

甘く、酔い痴れる  
くふんわりOLと凜々しい女子  
大生く

目次

一章	ふんわり美姉の無自覚な誘惑
二章	やわらかOLの穏やかな媚態
三章	凜々しい彼女のけなげな破瓜
四章	優艶姉と美少女の紊乱な姦係

一章 ふんわり美姉の無自覚な誘惑

シャワーヘッドから連続と撒き散らされる温かな水滴が、肌には纏わり付く湿気と濛々と立ち上る白い湯気をバスルームへと満たしていく。

(はあ……セックスがしたい)

一日の汚れと疲労を禊ぐ場にそぐわない、生々しい肉欲を胸中で独白した折原駿一は、風呂掃除用のスポンジにだらだらとぬるま湯を含ませ、鬱屈な溜息を吐いた。

(今日こそセックスを許して貰えると思ったのに)

浴槽に薄らと付着していた水垢を胡乱に刮ぎ落としつつ、駿一は高校から交際が続く美少女——今年大学生となった新堂沙耶花とのデートを漠然と思い返す。

友人に教えて貰ったイタリアンで目玉メニューの薪釜焼きピッツアに舌鼓をうち、

タイトル

その後は軽く秋物の服をウインドウショッピング。評判の良い映画を観賞してからはモンブランが有名な喫茶店で感想を交換し、小一時間ばかり談笑——。

(奇抜なブランじゃないけれど、沙耶花も楽しんでくれていた……はずなのに)

そろそろ残暑も退場の兆しを見せ、日に日に早くなってくる夕暮れの後押しもあり、帰りがけに駿一は沙耶花の唇を奪った。愛車の中という、ある種閉塞した環境だったこともあり、随分と長い時間キスを楽しんでいたものだ。

その間、沙耶花は嫌がる素振りなどは一切見せない。寧ろ、キスを切り上げようとする駿一を追いかけ、首に手を回して何度となく音を立てて唇を求めてきた。

興奮した駿一が小ぶりながらも形の良い乳房をシャツ越しに揉むと「あう」と、切なくも甘い鳴き声を漏らしたものだ。

(それなのに……最後の一線だけはまだ超えられないんだよなあ)

スポンジを握って水を切り、シャワーをざばざばと降らせて浴槽を洗い流している時、甘美な思い出が一転して急降下していく。お互い気分は盛り上がり、更にベッドで愛し合いたいと願う駿一に対して、沙耶花は無情にも拒否を突きつけてきた。

何度デートを繰り返して、何度甘い雰囲気になったとしても、セックスをすることに頑なまでに首を縦に振ってくれない。

(高校生の頃なら潔く諦めもつくんだけれど、お互いもう大学生になつてののに)

排水栓を締めシャワーから水流を切り替えると、吐水口から勢いよく湯が噴出した。じわじわと水嵩が増していく様を漫然と見届け、駿一は中腰になつていた姿勢を伸ばした。

沙耶花と付き合い始め、かれこれ三年が過ぎている。それなのに、駿一は未だ童貞のままだ。その一方、大学生になつてから初めて彼女ができ、付き合い初めて一ヶ月も経たない内に童貞を捨てた友人もいる。

後発組の彼らから嬉々とした報告を聞かされたことがあるだけに、この状況は歯痒いことこの上ない。

(沙耶花の両親が大人になるまでダメだつて言っているなら、僕がセックスをしたいつて駄々をこねても仕方ないのはわかつてゐる。わかつてはいるんだけれど――)

大学生になつたとはいえ、駿一もまだ臍を嚙っている身分だから大きな口を利けない。ただ、高校は卒業したのだからもう大人扱いしてくれてもよいのではないかと提議するのも偽ざる本音だ。

セックスを許してくれる年齢――成人になるまであと一年もあると考えるだけで、年頃の、かつ健全な性欲を持つ男としては暗澹たる気分になる。

## タイトル

(手や口でヌいて貰つてはいるけれど、それだけじゃ満たされない)

昨今の世情を考慮すれば身持ちの堅い部類に属するであろう沙耶花だが、ありがたいことに理性では御しきれない男の獣欲には一定の理解を示してくれている。性交は許してくれないものの、駿一の股間でくすぶる卑欲を手淫やフェラチオを用いて、高校生の頃から霧散させてくれていた。

そうした淫らな献身には感謝しているものの、治まるのはあくまで射精欲だけではない。己の怒張で愛する彼女を貫きたいという、牡の肉体に刻みつけられた性交欲求は決して消えず、月日が経つにつれてより色濃く蓄積していった。

(性欲、溜まつてるなあ。ちよつと妄想しただけでちんぽが膨らんできた)

朝起きてから一度も精を放っていないので、股間には卑猥な熱が渦巻いている。今日は沙耶花から淫戯を受ける機会も無かつたため、相当に欲求が溜まつていた。

愛しい彼女と初セックスすると妄想するだけで、萎んでいた肉茎にじわりと獣熱を帯びた血が流し込まれ、むくりと鎌首をもたげていく。

「たっだいまあ」

悶々としたまま浴室を後にし、濡れた足裏をバスマットで拭っていると、玄関の方から夜には似つかわしくない極めて明るい挨拶が響いてくる。駿一は過去何度も繰り

返していた懊悩を中断し、声の元へと裸足のまま赴いた。

「お帰り、姉さん」

浴室を出て玄関に繋がる廊下に出た所で、上がりかまちに腰を下ろしていた妙齡の美女がくるりと首を振り向かせる。照明を浴び、ふんわりとカールのかかった栗色のロングヘアが柔らかに翻った。

「あつ、駿君だあ。ただいまあ」

やや年の離れた姉——折原由香菜は、駿一と目を合わせると柔らかに頬を綻ばせる。無邪気過ぎる幼い笑みは、社会人としてのライフスタイルが板に付いた二十八歳にはとても見えない

「姉さん、また今夜は随分と飲んできたみたいだね」

しかしながら、この笑顔が幼子には一滴も口にできない大人の飲み物——酒が喚起させたものであることは、薄い紅を帯びた由香菜の頬を見れば明らかだ。

香水よりも遙かに濃密なアルコールの匂いが廊下にまで流れてくるのだから、ビール一杯二杯で済んでいるはずがない。

「ふふ、違うよ駿君。お姉ちゃんが行って来たのは会社の飲みニケーション。立派なお仕事の一環なんだよ。あ、これはおみやげね」

## タイトル

帰りがけに購入してきたのだろう。スーパーのロゴが印刷されたビニール袋が白い織指にだらりと掲げられている。仕事と言いながらもその貌には業務疲れの陰などまるでなく、上機嫌に充ち満ちていた。

（酒に弱い父さんならとにかく、姉さんが言うとは何の説得力もない）

由香菜の言い分を鵜呑みにするほど駿一は純朴ではなく、内心で片眉を跳ね上げる。そもそも、折原由香菜という人物は自他共に認める酒好きだ。

少々嗜む——程度ではない。休日になれば愛車を駆ってお気に入りの酒屋巡りをし、これまた大好きな映画を肴にして銘酒を愉しむ筋金入りと来ている。

自室に決して小さくないワインセラーが置かれている時点で、一般的な若い女性と比べ嗜好性が大きく逸脱しているのがわかるだろう。

長年会社絡みの酒付き合いが祟って身体を壊し、三年前から母と一緒に故郷へ戻って今では祖父母の農業を継いでいる父とは、あまりにも状況が違い過ぎる。

由香菜にとつて会社絡みの飲み会とは、ボーナスとは別に貰える不定期な賞与に等しく、懐を気にせず飲酒を謳歌できるチャンスだ。

（それでいて、酒に吞まれたことが一度も無いのが姉さんの凄いなだけだ）

酒好きなら、酩酊の醜態や二日酔いの悪夢とは腐れ縁で結ばれているのが普通であ

ろうが、由香菜はそうした不祥事とはまったく関わり合いをもたない。どれだけ飲んでも微酔いで留まり、後はひたすらザルとなる。

蟒蛇<sup>うらま</sup>どころか鯨が逃げ出すくらい馬鹿げたアルコール耐性があるため、どれだけ酒を啜<sup>すす</sup>ろうが決して潰れない。その特異的体質から、医者<sup>いしや</sup>の友人に医学の発展のため身体を研究させて欲しいと半ば冗談、半ば本気で言われたらしい。

(そもそも、姉さんがここまで酒好きなんて誰も思わないよ)

酒好き——という言葉から連想される人物像には、どちらかといえば悪い印象が付きまとう。その普遍的なマイナスイメージが、由香菜からはまったく感じられない。

その理由の筆頭として、姉の秀出した容姿が挙げられるだろう。

お世辞でも何でも無く、由香菜はとびきりの美人だ。ふんわりと波打つかールのかけられた、腰近くまで流れる栗色の髪。二重瞼の大きな瞳に柔和な眦。黒い柳眉に緩やかな弧を描くたおやかな鼻梁。紅い唇はしつとりと優しく結ばれ、初対面の者には例外なく安堵をもたらす。

今年二十八歳となり市内でOLをしている美姉だが、顔立ちが頗る柔和なこともあって実年齢より幾分下に見られ、二十代前半と間違えられることも珍しくない。

綺麗で優しげな麗女——それが、多くの人が抱く由香菜への第一印象であり、生粋

## タイトル

の酒豪とは誰も思わないだろう。

「そういえば姉さん、後少して風呂に入れるけれど、どうする？」

みやげとは名ばかりで、カマンベールチーズやビーフジャーキーといった典型的な肴が満載されたビニールを受け取りつつ、駿一は美姉の身体を見おろした。

(下手すれば女子大生並みに若く見える姉さんだけれど、学生に間違えられないのはこの身体付きのせいだろうな)

姉ながら、由香菜の体付きは魅惑に溢れている。170センチに迫る高い身長もさることながら、男ならまず先に豊かなバストに視線が惑わされてしまうだろう。

Iカップに至る豊か過ぎる乳房は、地味で堅苦しいスーツの胸囲を大きく盛り上げており、ブラウスの前立てに縫い込まれたボタンなど場所によっては水平状態になっていた。

胸よりはインパクトが弱いものの、グラマーにくびれた柳腰と安産型のなだらかな魅臀は、後ろに歩く者の視線を壘惑に傾かせる。

「うん、お風呂入るう。あ、私は後でいいから駿君が先に入ってね」

相当好い酒を飲みまくってきたのを傍証するように、由香菜の声調は実に上機嫌だ。今にも歌い出しそうな笑顔のまま、パンプスを脱ぐべく足首に巻かれたストラップ

へと織指が伸びていく。その美しい指先を、駿一の視線が追従する。

(特に脚なんて、沙耶花とは肉付きが全然違う)

同年のスレンダーな恋人は細くしなやかな美脚の持ち主だが、由香菜の脚は艶脂をふんだんに帯びるむっちりとした媚脚だ。

ナチュラルブラウンのパンティストッキングに彩られた二十八歳の成熟した女の脚は、健康美に溢れた女子大生の脚線と異なりエロティックな輝きを放っている。

豊乳も媚臀も魅力に富んだ由香菜だが、見る者によってはこのセクシーな女脚を一番のチャームポイントと挙げるだろう。

(残念なのは、これだけ可愛くてスタイルいいのに彼氏ができて長続きしないことくらいか)

容姿も性格も申し分無く、この界限では大会社である東堂建設に就職している由香菜は、本来なら彼女として引く手数多だ。

しかし、当人はいい男よりもいい酒を見つけることに腐心しており、合コン等の出会の場においても、花より団子に目が眩む有様だ。

おまけに、超が付くほどの酒豪のクセに「私と楽しくお酒に付き合えない男の人は好きになれない」と宣っているのも、彼氏ができてすぐに破局する。

## タイトル

そうした忌避的な意味合いでの悪評が周知されてしまったらしく、ここ数年は男の影すら無かった。

「うう……靴、脱げない……ねえ、駿君。手伝ってえ」

幾ら酔いには強くとも、一旦自宅に着いて気が緩んでしまうと集中力に支障が出てしまうのか。パンプスのストラップが上手く解けないらしく、悪戦苦闘していた美姉が社会人とは思えない何とも情けない助力を求めて来る。

「はいはい。ちよっと待って」

大好きな酒を好きだけ飲んできても、仕事の疲れを誤魔化すことはできないのだろう。年がやや離れていることもあり、普段は駿一が頼ることはあっても由香菜から頼られるケースは殆ど無い。両親不在の折原家において姉は実質の家主であり、生活費もすべて負担してくれているので、一家の大黒柱でもある。

そんな頼りがいのある由香菜だが、酔っているとまるで子供のようにはぐえにくる。他愛の無い世話とはいえ、弟として姉の力になれるのは嬉しかった。

「ふふ、ありがとう。それじゃ、お願い」

素足で三和土に降りるわけにもいかないため、サンダルでも出そうと靴箱を開こうとした矢先、由香菜の媚臀がするりと横滑りする。そのまま脚を浮かせ、くるりと身

体が九十度回された。

上がり框に長くむっちりした魅脚が横たえられ、パンティストッキングに輝く眩いばかりの脚肌が惜しげも無く晒される。

「ね、姉さん。行儀が悪いよ」

「でも、こうすれば駿君がわざわざ靴を出さなくてもいいでしょ？」

由香菜としては、駿一の手間をなるべく軽減したいのだろう。もつとも靴を載せたので上がり框は後で拭いておかなくてはならないから、結局は手間となってしまうのだが、そこまでは考えが及ばないらしい。やはり、随分と気が緩んでいる。

一度載せたのだから足を戻させても意味はないと諦め、由香菜の足下に駿一は腰を降ろした。アルコールの香りに紛れて、華やかな香水の匂いが鼻梁を撫でる。

（うわ……この格好だと、スカート奥まで見えそうだ）

ストラップに指を伸ばす途中、思わぬ光景が目飛び込んで来る。上がり框は横に長いが奥行きは狭い。その構造上、足の側面ではなく、真正面に身を屈めるしかないで、どうしても由香菜の美脚を爪先からふとももまで視界に納めてしまう。

そんな不埒な視線を遮るためにスカートがあるわけだが、筒状の布地は脚線に遡上する視線には何ら役目を果たせない。

## タイトル

グレーのスカートから突き出る、ナイロンの妖しい煌めきに濡れたふともも。

二十八歳の成熟した美脚の全景を前に、駿一はじわりと湧出した生唾を嚥下した。

（馬鹿、何見てるんだ。相手は姉さんなのに）

色欲に駆られた瞳孔を叱咤し、脳裏を曇らす淫らな欲求を慌てて散らす。

幾ら相手が極上が付くほどの美人でも、相手は一つ屋根の下で暮らす家族だ。こんな感情は気の迷いでも向けてはならない。

（沙耶花とセックスできないから、こんな欲求が溜まったんだろうな）

なまじ、先ほどまで風呂洗いの最中に悶々としていたので余計に情欲が溢れかえつており、理性は平静を装っているものの本心は動揺に右往左往する。

心拍数が闇雲に上がっていく危険なシチュエーションから一刻も早く抜け出すべく、駿一はストラップの巻かれた足首へと手を伸ばす。バックルを浮かせるべく足肌に乗せると「きゃっ」と由香菜が甘く小さな悲鳴を奏で、ヒールを浮かせた。

「駿君の指、くすぐりたい」

意識の高揚に比例して、感覚が敏感になっているのか。口元を押さえた由香菜が、あえかに脚肌を震わせる。玄関の照明を反射したナチュラルベージュのスキンが、キラキラとして艶めかしい。

「はあ……びっくりさせないでよ、姉さん」  
外面はさほど平静を崩さない駿一だったが、内心では心臓が跳ね上がらんばかりに脈を打っていた。

(姉さんが、あんな声を出すなんて)

女体の本能が漏らした甘い嬌声。平常心の隙間から滲み出た、快感混じりの囁り。長年一緒に暮らして初めて耳にした姉の艶声が、ぞわりと駿一の首筋を戦かせる。背筋を伝った淫らな漣が、欲求不満の男根をじくりと疼かせた。

(今更中断はできないし、早く終わらせよう)

下手に手伝いを拒否すれば、逆にやましさを露呈しかねない。敬愛する姉に隠し事をするのは嫌だが、この不純な感情は絶対に覚られてはならなかった。

足首の一点だけを見つめ直し、細いストラップを丁寧な緩めていく。バックルが開放されると、由香菜の足先がするりとパンプスから抜けた。

(僕とあんまり背丈が変わらないのに、足はこんなに可愛らしい)

175センチへ僅かに届かない駿一と比べ、由香菜の足は一回り近く小さい。それでいて、成人した女らしく丁寧なペディケアが施された爪先は艶やかで美しい。

ナチュラルブラウンのヌードトゥに透けた爪先が、ストッキングの輝きをまぶされ

## タイトル

ていつそう華やかな彩りを放つ。女体の先端に宿されていた思わぬエロティシズムに、駿一の瞳孔が大きく開いた。

「ああ、この開放感、気持ち良いなあ。サンダルで仕事したいよ」

無自覚な色気を魅惑の身体から撒き散らしつつ、由香菜は無邪気な愚痴を吐く。

一日中、窮屈なパンプスで歩き回っていたためだろう。社会人にあるまじき発言をした二十八歳は、凝りをほぐすように足指をくにくにと動かす。形の良い足指が愛らしく折り曲げられ、ストッキングが薄く引き延ばされた。

爪先の合間に化粧の輝膜が張られ、艶のある光沢を反射させる。

(姉さんの足指を見る機会なんてあんまり無かったけれど、こんなエロいなんて)

由香菜は家の中でショートソックスを愛用しており、素足の時でも静止した足指をこれだけ間近で直視する機会はない。それだけに、美姉が無防備に見せた足には著しい魅力を見出してしまふ。

(うっ、マズイ)

下腹部に、牡のやましい卑熱が流れ込んでくる。ボクサーパンツに隠れ、十九歳の若々しい男根が疼く。

「ほら、冗談言っていないで、早く反対の足を伸ばして」

焦りを隠したまま戯言をいなすと由香菜は嬉しげに「はあい」と、まだパンプスを履いたままの右足を伸ばした。自由になった左足は僅かに引かれ、脱いだままにされていた靴を避けて外側に流される。

途端、視界に飛び込んだ光景に、駿一は呼吸を忘れた。

(姉さんのスカート、奥まで覗けて……)

ナチュラルベージュの妖しい輝きを帯びたふとももが、足先に追従して開いていた。むつちりとした内腿に生じた指一本にも満たない隙間。その最奥に、パンティストッキングのセンターシームに引かれ、白く眩いばかりのショーツが垣間見えた。

二十八歳の美女が無防備にさらけ出した、扇情的な薄布。ストッキングの艶めかしい煌めきも相まり、白いクロッチから醸し出されるエロティシズムに、駿一は湧出した生唾を嚥下した。

(まさか、こんなところで姉さんのショーツを見られるなんて)

酒好き故に誤解されがちだが、由香菜の私生活は墮落とは無縁だ。自室は綺麗に片付いているし、部屋着もだらしなく着崩したりはしていない。

それだけに、弟として一つ屋根の下で暮らしていても、姉のランジェリーを見る機会など殆ど無い。小学生の頃、不注意で数回ほど浴室で着替えに鉢合わせた時くらい

## タイトル

だ。中学生以降は一度もない。

(パNSTでキラキラ光ってる姉さんショーツ、エロ過ぎるよ)

彼女である沙耶花はセックスこそさせてくれないが、ランジェリー越しならば股座への愛撫も許してくれている。そんな恋人との恥戯を通じてショーツは見慣れていたはずだったが、相手が由香菜では何の免疫にもならない。

輝織によつてメイクされたショーツは成熟した女を見せ付け、十代の彼女にはない色気を溢れかえらせる。生足に穿かれたショーツと異なり、ぴっちり脚を包み込むパンティストッキングの着圧によつて、クロッチは緩み無く秘部に密着していた。

(脚の肉、あんなにむちむちして)

ふとももに圧迫され、薄布の奥にある華丘が盛り上がる。一直線に張られた化繊のセンターシームが隠された媚裂に食い込み、二十八歳の女性器を浮き彫りにしていた。牡に刻まれた劣情を煽る無防備な痴態が肺に熱を籠もらせ、セックスに飢えた男根が堪らず隆起してくる。

(駄目だ……これ以上見たら、絶対に駄目だ)

男の見境無い衝動が、二十八歳の美女が穿くショーツを凝視しようとする。駿一は耳鳴りがするほど奥歯を強く噛み、野卑な衝動を抑え込む。

相手は敬愛する姉だ。どれだけ女としての魅力を強く宿していても、決してふしだらな衝動を抱いてはならない。

ハーフパンツに潜んだ牡根がずんぐりと膨張し、竿肉へ無作為に巻かれた血管がどくりと浮き上がる。その禁忌の衝動が肥大するより早く、駿一は手早くもう片方のストラップを外し、窮屈そうにしていた女足からパンプスを脱がせた。

「わあ、ありがとう。駿君」

足指を自由に動かせるのが心地良いのだろう。軀から解き放たれたとばかりに由香菜は大きく深呼吸をし、強張った関節を解きほぐすように足指を無造作に動かす。

その間も脚は一向に閉じられず、美麗なふとももの隙間から魅惑の純白が悩ましげに輝き、豊かな脚肉がむちむちと揺れていた。

（姉さんは気付いていない……けど——）

幸いにして、由香菜は自分のショーツを見せてしまっていることや、駿一が覗いてしまったことにも気付いていない。このまま口にしなければ、お互い何一つ不利益を被ること無く、平穩に床へ就けるだろう。

（けど……姉さんには、正直に伝えなくちゃ）

家ならばまだいいが、外で同じ過ちを犯していない保証は何処にもない。女として

## タイトル

気を緩ませないためにも、由香菜には危機感を喚起させなくてはならないだろう。

何より、最愛の姉に対して、さながら覗き魔の如き行為をした欺瞞が許せない。由香菜からの信頼を踏みにじる真似は、絶対にしたくはなかった。

「姉さん、そんな脚広げてるから、さつきからショーツが見えちゃってるよ」

極めて冷静に。努めて平靜に——。

欲望と困惑を嚴重に包み隠し、美姉の痴態をやんわりと指摘する。

微酔していることもあり、駿一が何を言ったのか即座に理解はできなかったのだろう。由香菜はきよとんと目を瞬かせ、ワンテンポ遅れてから「キャッ」と小さな悲鳴をあげた。

咄嗟に脚が閉じられ、勢い余って接触したパンプスが上がり框から落下し、三和土を横転する。

余程慌てたのだろう。合わせられた膝は勢い余って乗り上げてしまい、柔らかなふとももが部分的に重なり合う。

酒精による火照りとは異なる、羞恥の朱が由香菜の頬をうつすらと染めていく。

「もう。駿君、もっと早く教えてくれればいいのに」

「い、ごめん。姉さん」

余裕のある姉としての貌でもなく、酒を愉しむ屈託の無い貌とも違う。まるで、思春期の少女さながらの恥じらいを見せた二十八歳に、駿一は戸惑いを隠せない。

(姉さんが、こんな可愛い反応をするなんて)

学生生活をとづくに終え、凜々しいスーツスタイルで仕事をこなす美しい姉。

それだけに、たかがショーツを見られたと知っただけで思春期の女子さながらに慌てふためくなど予想も付かない。

股間に充滿している卑猥な熱とは別に、胸の奥に甘酸っぱい感覚が湧き出した。

「あつ……えつ、と……ごめんね、駿君。せつかく注意してくれたのに、非難しているみたいない言い方して」

「そんな……全然気にしてないよ」

駿一が狼狽えたのは、自分が責めてしまったからだと勘違いしたらしい。由香菜は申し訳なさに頭を垂れるが、それこそ誤解も甚だしかった。

「それに、駿君は弟だもの。よく考えたら、ショーツが見えて恥ずかしがるなんて、お姉ちゃんとして変だよ」

羞恥の紅を残したまま由香菜は無理矢理に笑顔を作るが、その頬は強張りを隠せない。姉の自責に駿一は反射的に「けれど」と言いかけ、続く筈だった言葉を喉元で堰

## タイトル

き止める。

(けれど——僕達は血が繋がっていない義姉弟なんだから、姉さんが恥ずかしがるのが当たり前だなんて……絶対、口にできない)

駿一と由香菜は一つ屋根の下に暮らす姉弟だ。近所でも仲が良いと評判だし、実際に喧嘩らしい喧嘩は殆どしたことがない。世間一般からすれば、理想的な姉弟だろう。しかし、姉と弟に血の繋がりは無い。

十年前、物心つく前から妻を——駿一の実母を亡くしていた父が再婚した継母の連れ子——それが、由香菜だ。

(姉さんは……本当の姉さん以上に、僕を大切にしてくれた)

血が繋がっていない故に、だったのだろう。出会った時に駿一が九歳で由香菜が十歳だったということもあり、年の離れた新しい姉は未熟過ぎる弟を可愛がってくれた。普通の姉弟にあるべき血の絆がない代わりに、由香菜は実の弟以上に駿一を愛してくれたのだ。

そんな美しく優しい姉を前にして、血が繋がっていないからと言えるはずも無い。

由香菜がこれまで努力してきた姉としての振る舞いを、無下にはできなかつた。

(でも……だからこそ——)

由香菜は駿一を弟として愛してくれている。  
その愛情が義理の姉と弟を繋ぐ絆に起因していると理解してしまっているだけに、  
駿一は由香菜を肉親であると同時に一人の女であると感じてしまおう。

「それじゃ、ありがとね。駿君」

ショーツを見られた気恥ずかしさに耐えられなかったのか。あるいは姉としての失  
点を有耶無耶にするためか、由香菜は何処か曖昧な笑みを浮かべ、乱れたパンプスを  
置き去りにしたまま足早に廊下を進んでいく。

だが、途中で歩みを止めると「駿君」と弟の名を呼び、ゆるりと振り返った。

「あのね……お姉ちゃん、駿君が大好きだよ」

一つ呼吸を整えた後、柔らかな笑顔が駿一を照らした。

ほんの微かとはいえ、長年家族として愛していた弟を、血の繋がらない異性として  
扱ってしまった贖罪だったのだろう。

優しい由香菜だからこそ、己の迂闊さを看過できず、こうしてわざわざきちんと向  
き合い、家族としての愛を明確に示してくれる。

「うん。僕もだよ、姉さん」

深い思いやりに応じるため、駿一もまた姉を敬愛する弟として微笑みを返す。

## タイトル

駿一が弟として傷付いていないとわかったのだろう。懸念が払拭され、美姉の笑顔  
に眩しいばかりの華が咲く。

くるりと踵を返した姉の足取りは軽く、姉弟愛を実感する至福に満たされた心地良  
い聲音が廊下に弾んだ。

（ごめん……姉さんが思っているほど、僕は良い弟じゃないんだ）

姉の背中が自室へ続く階段へと消え、踏み板から生じていた足音が静寂に取って代  
わられると、駿一は精一杯の自然さを寄せ集めて作り上げていた笑顔を消す。

溜息と共にハーフパンツの中へと掌を入れ、不自然な方向に圧迫されていた怒張を  
弄り直す途中で、眉を大きく顰めた。

（姉さんはあんなに綺麗で優しいのに……僕は最低の弟だ）

未だ勃起が衰えない怒張から手を離し、ハーフパンツから腕を引き抜く。

掲げた掌には、精液と見紛う大量の我慢汁が、玄関の灯りに照らされてべっとり  
穢らわしい水系を引かせていた。

（時間がかかったけれど……ようやく気分が落ち着いた）

未だ身体の節々から細い湯気を立ち上らせつつ、駿一はふやけた足裏で階段を上る。姉である由香菜に抱いた正視し難い情動を消し去るため、駿一は湯張りが終わると即座に風呂へと飛び込んだ。肩まで湯に浸かるだけではなく、頭まで沈めて身体に籠もった背徳の情欲を長時間かけて洗い流す。

普段の倍以上の時間をかけて湯に浸かったこともあり、無節操な剛直も次第になり、を潜め、不謹慎な衝動は卑肉の萎みと共に薄れていった。

(これで、変に取り繕わなくても姉さんに声をかけられる)

先刻のように勃起を隠して情欲を抑え込み、姉に偽りの愛想を振りまくという、面従腹背染みた真似をしなくても済む。いつもの、姉が可愛がってくれるに値する弟で在れると考えるだけで、心が俄然弾んだ。

「姉さん、お風呂空いたよ」

「ゆかな」と、アーチ状のネームプレートが掲げられた扉を軽くノックする。普段は扉越しにすぐ応答があるはずなのに、今夜は何のリアクションも無い。

もう一度、今度は手の甲に少し力を込めてノックをするも、返ってくるのは無為な静寂だけだ。

(まさか……とは思うけれど)

## タイトル

由香菜に限って酒が原因で昏倒することはないだろうが、それでも万が一ということも考えなくてはならない。

「姉さん、入るね」

念の為、一言断ってからドアノブを捻る。ほんの微かに蝶番が擦れ、廊下とは異なる甘やかな空気が駿一の鼻梁を掠めた。姉の自室へと一歩踏み込む。

女らしい洒落た小物が部屋に散見するが、飾り気のない無骨な直方体——由香菜が初任給で購入した個人用のワインセラーが、視界の端で偉容を誇っている。

(ああ……参ったな、これは)

部屋の中央付近まで進んだ駿一は、ゆったりとしたダブルベッドで仰向けになっっている姉の寝姿に心底安堵し、そして一拍ついてから低く唸る。

由香菜は飲酒に対して鉄壁と言っても過言では無い耐性を持っているが、一度眠ったら朝まで起きない欠点があった。肩を揺らす・呼びかけるといったソフトなもの論外として、耳元に目覚まし時計を鳴らしても無意識のままベルを止めてまた夢の世界に戻ってしまう。

ついでにいうなら、一晚経って起きるとベルを鳴らされていたことすら記憶していない有様だ。

(風呂に入るって言うていたからこのまま寝かせておくわけには……)

玄関での遣り取りと思いつきに、由香菜としては寝る気は無かったのだろう。掌に辛うじて掴まれているスマートフォンは電源が入ったままだし、服装は寝間着ではなくスーツのままだ。上半身はブラウスになっているもの、下半身はスリットスカートを穿いており、パステイストッキングも脱いではいない。

脚肌をナチュラルブラウンのスキンが覆い、降り注ぐ灯りを綺羅と散らしていた。(メールの返信をしている最中に寝落ちしたみたいだ)

スマートフォン画面には、書きかけの返信らしきものが映っている。宛先の「ミオ」なる人物は、確か由香菜と学生時代から仲が良い医者だったはずだ。

弟とはいえ姉のプライベートな付き合いを詮索するわけにもいかないの、覗き見をしないようにそつとスマートフォンを移動させる。

(まだ眠ったばかりなら起きてくれるかもしれない)

由香菜の寝入りの深さを知っているので、目を覚ます可能性が絶望的なまでに低いのは重々承知している。

しかしながら、己の邪念を鎮めるために長風呂し、それが原因で由香菜が睡魔に唆されてしまったのであれば、責任をもつて起こさなくてはならない。

## タイトル

「姉さん、ほら起きて。遅くなったけれど、お風呂空いたから」

ベッドの縁まで寄り姉を呼び起こそうと試みるものの、返ってくるのは心地よさげな細い寝息だけだ。ブラウス越しに肩を揺ると、あえかな喉から「ん……」と微かな吐息が漏れる。

(うわっ……おっぱいがぶるぶるする)

もっと力強く起床を促そうとするものの、予期していなかった問題が駿一の行為を鈍らせる。由香菜の身体を揺るたび、豊か過ぎる母乳が大きく躍動するのだ。

ブラジャーは巨乳を下から掬いあげる効果はあっても、左右から押さえ付ける効果は薄いらしい。Iカップのバストという、半端なグラビアアイドルでは太刀打ちできない巨乳は、ほんの僅かに肩が動くだけでブラウスにダイナミックな波を刻む。

蠱惑を帯びた淫景に自然と視線が吸い寄せられていると気付き、駿一は慌てて頭を振った。

(僕は何を馬鹿なことを……これじゃ、さつきと一緒にじゃないか)

消えていたはずの黒い熱が、じわりと股間に染み出てくる。長風呂までして禊いだ邪念が再燃しては堪ったものではないが、由香菜を目覚めさせる努力を早々に放棄するのは論外だ。

胸中で無礼を詫びながら姉の両肩を浮かせ、くるりと女体を横に倒す。背丈こそ高いものの、女だけあって由香菜の身体は頗る軽い。抵抗が皆無なこともあり、大した労力も必要無く二十八歳の身体が俯せとなり、魅惑の双丘が背に隠れる。

(うっ……おっぱいは揺れなくなっただけど、今度は姉さんの尻が――)

これで不埒な衝動を抱くこともないだろうと一息吐く駿一だったが、その考えはすぐに浅薄だったと思ひ知らされる。姉の upper body に圧迫され、ブラからはみ出した乳肉がブラウスの輪郭を崩していたが、マットに押しつけられているので、もう煽情的な躍動はしない。

その代わり、なだらかな背が動かされるたびに安産型の豊かな魅臀がむちむちと弾む。女体の稜線に沿うタイトなスカートが、由香菜の成熟した尻を忠実に描き出した。まだ女として発育途上にある沙耶花の尻とは、大きさも肉付きも何もかも違う、艶やかな魅臀。

(見たら駄目なのはわかっているのに)

駿一が焦点を合わせているのは由香菜の顔だ。それなのに、視界の端で媚惑に弾む尻尻に、不埒な意識が引き寄せられてしまう。牡の本能を催淫させる蠱惑の丸みが、姉弟の禁忌などものともせず駿一の理性を蝕んだ。

## タイトル

(もう、諦めよう。やれるだけのことはやったから自室に戻るんだ)

これ以上この場にいるのは危険だと、倫理が警鐘を鳴らしていた。既に、直接見なくとも判るくらい、凶悪な律動に鼓舞された男根が大きく膨張していた。

我慢汁に塗れていたペニスをせっかく洗い流してきたのに、このままでは再び穿いたばかりのボクサーブリーフに水系を引かせかねない。

(せめて、姉さんが体調を崩さないようにしなくちゃ)

時期はまだ夏の延長にあるが、そろそろ夜は涼しさを感じられるようになってきている。立ち位置を移動させた駿一は、ベッドの隅でコンパクトに折り畳まれていたタオルケットを広げた。

「ん……う……」

いざ、由香菜へタオルケットを被せようとしたところ、微かな吐息と共に女体が振られた。タイトスカートを張り詰めさせた臀肉が突き出し、むっちりとしたふとももがもぞりと擦り合わされる。

パンティエストッキングを穿いた魅脚がナチュラルブラウンの煌めきを放ち、成熟した女の甘い匂いを拡散させた。

(あのエロい脚が、またこんな近くに)

タオルケットを浮かせていた手が、宙で縫い止められる。ストラップを取り外す際に見られた、あの艶めかしい姉脚が再び手を伸ばせば届く距離に置かれていた。

ふつくと盛り上がったふくらはぎに、キュツと引き締められた可憐な足首。すらりと伸びた足裏に、細く行儀良く並んだ小さな足指。

化繊に透けた肌理の感触と、ふんわりとした脚肉の感触が不意に蘇った。

「あ——」

性欲を惹起させる光景が、刹那の間意識を途切れさせる。その隙を狙って、指の間からすり抜けたタオルケットが由香菜のふくらはぎに雪崩れ落ちた。僅かに遅れ、駿一は落ちた寝具を拾おうと反射的に手を伸ばす。

（姉さんの脚に触れて——）

勢いの余った指先が、布地だけではなく由香菜のふくらはぎにも接してしまう。柔らかな脚肉に指先がふんわりと埋まった。咄嗟に腕を引き上げるべきなのに、指から遡上する極上の触り心地が、女体との接触を押し止める。

（これは故意じゃない……偶々、触ってしまっただけなんだ）

姉の身体に許しも得ず触れてしまった言い訳が、咄嗟に脳裏で組み立てられる。

もともと、アクシデントだと宣いながらも、駿一の指は微動だにしない。そのまま

## タイトル

時が停止したように、ほのかな温かさを宿した脚肉に意識が集約されている。

（もう、離さなくちゃいけない。僕には、沙耶花だっているんだ）

相手が姉とはいえ、血の繋がってない妙齢の美女を無闇に触れていいはずがない。

それも寝込みなのだから余計に悪い。加えて、駿一には長年付き合ってきた可愛い彼女がいる。

誰もが羨む闊達とした美少女を恋人にしていながら、二十八歳の美姉へいたずらに触れるなど、沙耶花と由香菜どちらに対しても不義でしかない。

（でも、姉さんを……僕の初恋だった姉さんに触れられる機会なんて、二度と無い）

誰にも打ち明けたことも無い、禁忌の秘密。

どんな親しい人間であろうと決して明かさなかつた背徳の想いが、駿一の胸中でじくりと漏れる。

偶発を言い訳にして動かさなかつた指先が、すらりとストッキングの表面を滑った。指の先端だけではなく、掌すべてでナイロンの輝きにメイクされたふくらはぎを味わう。誰にも見咎められず姉の身体に触れられるという誘惑の機会が、良心の隙間に魔を差させる。

（僕が最初に恋をした年上の女……それが、姉さんだった）

まだ恋も知らない小学生の頃、新しい姉となった女性は、駿一にとって誰よりも優しく賢く、そして美しく見えた。

由香菜は駿一にとって自慢の姉であったが、中学に進学する頃にはそれが姉への敬愛ではなく、異性への恋だと気付く。

初恋の女が自分の姉である事実には、駿一は懊悩し苛まれた。折しも、当時女子大生だった由香菜に初めての彼氏ができたことが、駿一に非情なる現実を突きつけ、そして未熟な恋心を打ち砕いてくれた。

手痛く不相応な失恋があったからこそ、由香菜とは仲の良い姉弟関係を継続できたし、沙耶花という美少女を恋人にすることができた。

結果論からすれば、駿一の初恋は砕けるのが最良の選択だったといえるだろう。

(でも……僕は諦め切れてなかった。それを、今夜思い知らされてしまった)

姉の艶熟した身体は毎日見慣れているはずの駿一にすら魅力的に映る。それは、由香菜が抜群のスタイルを誇るからであり、牡の本能がもたらす自然な反応だと思いついでいた。

否、思い込むことで、姉への劣情を牡の度し難い衝動に託けていたのだと気付いてしまった。酔った姉の蠱惑に満ちた甘えが、無防備に肢体をさらけ出したあどけない

## タイトル

寝姿が、自省を強いていた恋慕を燃え上がらせ鬱屈していた肉欲を焚き付ける。

「姉さん……ごめん」

色欲という名の悪魔が、駿一の理性を狂わす。由香菜が知ったら許さないであろう淫行を承知で、駿一は懺悔を零した。

ふくらはぎに落としていた掌でゆっくりと円を描く。パンティストッキングのもらすサラリとくすぐったい感触が、女性の温かさと相まって蕩けるような官能を駿一の皮膚に与えてくる。腕を遡上する甘美な感触が、男の四肢を幸せに蕩けさせた。

柔らかに成熟した脚肉を優しく揉むと、指の間にぶっくりと白い脚肌が浮かび上がり、女の艶脂を堪能させてくれる。

「ああ……姉さんの脚、本当にいやしくて綺麗だ」

過去、幾度と無く胸中で繰り返した礼賛。決して表立って口にできなかった、艶美溢れる女体への賛美。

由香菜に聞かれる心配がないからこそ、駿一は己の憧憬と肉欲の混じった嘘偽りの無い本音を独白する。

美麗なオフィスレディのふくらはぎをしばし賞翫した後、タオルケットを手の甲で払い除け、足首から爪先まで露出させた。魅脚の全景が視野に映し出され、ほんの微

かに漂う女の汗の匂いが鼻孔をくゆらせる。

「姉さんの汗の匂い、働く女って感じがして凄く好きだ」

営業という職種の関係上、容易に服を着崩せ無いのだろう。朝、送り出した時は水の匂いしか感じなかったが、仕事が終わって帰宅した由香菜は見栄えこそ変わらないうが、周囲の空気は明らかに色を変える。

もったも、その匂いは汗臭さとは無縁だ。汗が蒸れ、揮発を繰り返した姉の匂いは、香水のラストノートと合わさって濃密なフェロモンへと変貌している。

「こんな変態みたいな真似をするのは、姉さんが牡を誘惑するエロい匂いを撒き散らしているからだよ」

普段は家族に相応しい節度ある距離を保っているため、うっすらとしか嗅ぎ取れない姉の牝香を密着に近い距離で嗅ぎ取れた。

目と鼻の先にまで顔を寄せ、魅脚から立ち上る甘美な匂いを胸一杯に吸い込む。牝だけを酔わせる牝のアルコールが肺に充滿した瞬間、全身の神経が甘く痺れた。血管が拡張され、動脈からうねりを帯びた熱い血が下腹へと流れ込んでいく。

牡の獣幹が反り返り、蕩のように絡んでいた血管がグロテスクに浮き上がってくるのが感じられた。

## タイトル

「足先の匂いなんて特に濃いね。ああ、堪らない」

長時間に渡ってパンプスを履いているためだろう。足先に近付くほど、蒸れた汗の匂いが強くなる。脳裏を蕩かす甘い香水混じりの匂いとは異なるが、発汗量が多い分濃縮されたフェロモンは桁違い高い。

酸味を含んだ匂いが鼻孔を通り、気道に入る前に口内に流入する。働く女の汗混じりの匂いが舌に付着し、淫らな酸味が瞬く間に口蓋から涎を滴らせた。

裏筋が引き延ばされるまで、牡の剛直がぐんと肥大する。ボクサーブリーフに押さえつけられ、痛みを感じるまでに勃起した欲茎を開放しようと、駿一はハーフパンツごと下着を引きずり降ろした。

孟宗竹の如きしなりをあげ、まだ童貞ではあるものの野太く勇ましい巨根がパンツと宙を切り上げる。圧迫されていた竿腹が窄められていた尿道と共に拘束を解かれるや否や、淡精がとぶりと噴き零れた。

竿腹を伝った大量の我慢汁が、鞆丸にまで垂れてねっとり床に糸を引く。

「姉さんを穢した証拠、付けるね」

姉の身体をこんな淫らに触れる機会など、もう二度と訪れないだろう。であればこそ、この美麗な肢体を誰に知られることなく穢しておきたい。

「このむっちりしたエロい脚に、ちんぽを這わせるよ」

膝立ちでベッドに乗った駿一は、身を屈めて己の逸物を傾斜させ、由香菜の足首にカウパー汁の滴る鈴口をねっとり押しつけた。二十八歳の脚肉が音も無く陥没し、粘性の溶け込んだ牡の欲涎がじわりとストッキングに染みこんでいく。

そのままゆっくと脚線に沿って豪牙を横滑りさせ、穢れた軌跡をふくらはぎにじつくりと引いていった。

「姉さんのパンスト脚、滅茶苦茶に気持ち良い。ああ、最高だよ」

鈴肉が輝織と直に接し、甘い摩擦が男の股座を戦かせる。姉の脚に獣根を押しつけ、あまつさえ淡精を塗りつけていく背徳の淫行に背筋が恍惚に震えた。

ふくらはぎの稜線を超えて膝裏にくぼみへと滑り、ふとももの中腹に至ったところで我慢汁が途絶える。ナメクジの這い跡を彷彿とさせる、ぬらぬらと光った卑猥な証拠を俯瞰し、駿一は奇妙な征服感を覚えた。

「ほら、凄いでしょ。僕、姉さんの身体を見ているだけで、こんな興奮するんだ」

睾丸から竿腹にかけてこびり付いていた淡精を掬い上げ、そっと由香菜の口に含ませてみる。小さな紅唇に卑猥なルーージュが引かれ、穢らしい光沢が散乱した。

指先で紅唇を引っかけて、強引に柔らかな舌で舐め取らせる。精液ではないにしろ、

## タイトル

牡の色欲によつて搾られた淡精を憧れの美姉に飲ませる蛮行は、駿一の鼻息を嘗て無  
いほど荒く乱した。

(こんな酷いことをされているのに、姉さんの様子はまったく変わらない)

脚を触られ牡の体液を塗りつけられたというのに、由香菜は目覚める気配どころか  
寝息のリズムすら変わらない。もとより、一度酒を飲めば生半可なことでは起きない  
とはわかっていたが、改めて姉の寝入りの深さを目の当たりにする。

それは同時に、駿一の淫行をより大胆なものへと駆り立てる衝動へと繋がった。

「スカート、捲っていくよ」

姉の穏やかな寝顔から視線を変え、より破廉恥な欲求を満たすべく、駿一は二十八  
歳のむっちりとしたふとももに掌を被せる。酒の作用か、心持ち女体は平熱より温か  
い。柔らかさの中に微かな引き締まりが感じられたふくらはぎとは違い、艶脂が充た  
されたふとももは何処へ触れても極上に蕩けている。

「姉さんは脚が太いって嘆いているけれど、僕からしてみたらこんなエロい脚をして  
いる女なんて見たことがないよ」

奇妙な話に聞こえるが、これだけ男をそらせる媚脚を持ちながら、当の由香菜は  
脚にコンプレックスを抱いている。所持しているスカートはロングの割合が多く、膝

上より丈が短く脚を魅せるスカートは数えるほどしかない。

このむちむちとしたふとももは男にとつては魅力にしかならないのだが、女である由香菜は太くてみつともないと自虐している節がある。体重ほどではないにしろ、細い・太いの見解には、男女で著しい差があると感じずにはられない。

「せっかく好い脚してるんだからさ。姉さんはもつと見せびらかすべきだよ」

ナチュラルブラウンの輝きを放ったふとももを撫でつつ、駿一はスカートを手の甲で押し上げていく。もつとも、タイトスカートは伸縮性に乏しく脚肌に密着しているので、愛撫をしながら片手間に脱がせない。

ふとももが中腹まで露出した後、両手でスカートを挟み込んで一気に押し上げていく。腰近くまで裾が捲り挙げられると、ようやく艶脚の全貌が明らかとなり、布地を張り詰めさせていた魅臀が露わとなる。

むっちりとしたふとももの付け根に相応しい、安産型の大きな姉尻は駿一の目を大きく見開かせる。

(こうやつて直に見ると、姉さんの尻はしゃぶりつきたくなるくらいエロい)

女子大生である沙耶花の尻は可愛らしい桃尻であり、女としてのアピールポイントとしてはまだまだ不足感が否めない。一方、由香菜の尻肉は幼さとは決別され、成熟

## タイトル

した大人の色気が溢れた艶臀だ。

豊かな尻肉はそれだけでも母性を色濃く感じさせ、牝としての魅力を引き立てる。

「白いショーツは意外だったけれど、姉さんにはとつても似合っているよ」

アダルトな魅力を醸し出している姉の肢体だが、ランジェリーのカラーはとても淑やかで溫和しい。ホワイトのフルヒップショーツは緻細なレースこそ編み込まれているものの、華美にはほど遠い清楚なものだ。

蠱惑を帯びた魅臀とはかけ離れたショーツは、由香菜にあどけない可愛らしさを与えている。ナチュラルブラウンに透けていてもわかるなめらかな肌理と、純白のランジェリーのコントラストは、美しくも艶やかな官能を醸し出していた。

「こんなエッチな身体を持つ姉さんと、いままで一緒に暮らしていたなんて」

パンティストッキングで包み込まれた二十八歳の臀肌に優しく指を乗せた後、波が崩れるように掌を這わす。駿一の掌では到底収まりきらない、あまりに豊熟した女臀。下半身を支えるだけあって、女脂の溶け込んだヒップはむっちりと柔らかく、淫らかな弾力に富んでいる。

ショーツごとやや乱暴に揉みし抱いても、薄布に僅かな皺が寄るだけで魅臀は艶美な丸みを崩さない。

「ふう、ん……あ……」

規則的な寝息とは明らかに異なる甘い鳴き声が、情欲に曇っていた駿一の危機意識を明瞭にする。息を止めて恐る恐る身体を向き直らせるものの、由香菜の臉は開いていない。一気に早鐘を打ち始めた心音がゆっくりと落ち着きを取り戻してから、駿一は深い安堵の息を吐いた。

（目は覚めないけれど、身体だけが刺激に反応しているのか）

心臓が昼夜を問わず動き続けているように、意識は完全に眠っていても身体感覚はどうやら自動的に働くらしい。念のため、由香菜の表情を観察しながら何度か臀肌を愛撫してやると「んう」と、紅唇から切なげな吐息が漏れるが、臉に隠された瞳孔が駿一を見据えることはなかった。

（これ以上触っていたら、幾ら姉さんでも起きるかもしれない）

寝入りが深く何をやっても起きないと知っているものの、絶対の保証はない。麻酔をかけられているわけでもないのだから、身体へ刺激が蓄積すればやがて意識も引きずり戻される可能性が高いだろう。

（いや、大丈夫だ。もし目が覚めても、朝になれば姉さんは忘れていくはず）

一瞬、もうこんな犯罪染みた淫行は止めるべきではないかと、動揺を盾にして倫理

タイトル

が訴える。しかし、股間で劣情を煮えたぎらせた逸物はいささかも勃起を衰えさせず、強烈な肉欲を後押しにして継続を主張した。

スカートスーツのまま姉が無防備に寝姿を晒すという、だらしなくも貴重で乱れた情景が、リスク概念をまやかす。

（僕は弟として最低のことをやらかしているんだ。だったら、最後は姉さんのエロ尻とふとももに、思いっきりザーメンをぶっかけてやる）

姉に誇れる好い弟としての駿一は、もう死んでも同然だ。今ここにいるのは、由香菜の隙に託けて卑猥な悪戯をしている、ただの悪漢に過ぎない。

姉がこの裏切りを覚えていなくても、駿一は一生涯に渡って欲望に負けた淫夜の記憶を焼き付けていく。どうせ罪を背負うのならばと、半ば自暴自棄とも言える決意が駿一の獣欲を焚き付ける。

「姉さん。僕が射精するまで、たつぷり身体を堪能させて貰うよ」

天を衝く逸物からは再び淡精が滲んでいる。少し自慰に励むだけで簡単に子胤を吐き出すことはできるが、せっかく由香菜の下半身が露出しているのだ。我慢の限界まで二十八歳の甘い艶の溶けた肢体を味わっておきたい。

「まずはむちむちのエロふともも、いっぱい愉しませてね」

日常においても滅多に熟視する機会が無く、それだけにもどかしい欲望を抱かされていたエロティックなふともも。美しい姉の腿肌にそっと触れ、手首を払って掌をすりりと滑らせる。

ナチュラルベージュに輝く糸がくすぐったく駿一の肌を擦り、女体の穏やかな温もりを伝えてきた。

夢でも幻でもない、憧れ続けていた美姉のふとももに触れている。その事実は、エロティックな衝動とは別に酷くプラトニックな感動を駿一にもたらした。

「この柔らかさ……昔から何一つ変わっていない」

艶美なふとももの感触を掌でしつとりと味わいながら、駿一は記憶の奥に秘めた思い出を手繰り寄せる。

まだ由香菜と姉弟になったばかりの頃、このふとももを膝枕に耳かきをして貰ったことがある。初めは大好きな姉と密着するのが嬉しく、毎日のように耳搔きをして貰ったものだ。小学生の高学年になる頃には美しい姉と密着するのが気恥ずかしくなり、由香菜からの申し出を固辞してしまう。

それでも、十歳近い年上の姉が許してくれたふとももの感触は、今でもしっかりと記憶の奥底に焼き付いており、フェティッシュな欲望の源泉を成していた。

## タイトル

「この頬が蕩けるような感触……懐かしいよ」

愛撫をしていた掌を横に滑らす。駿一は体躯を前傾させ、頬を直に由香菜の脚に触れさせた。昔はスカートを介してでしか感じられなかった、姉の柔らかな脚肉。それが、極薄の化繊を透かして二十八歳の脚肌を温かな熱と共に伝えてくれる。

由香菜の脚に顔を埋めたまま深く息をすると、脳を蕩かす媚香が鼻孔を擦った。うなじがゾクゾクと痺れ、背筋に甘い奔流が伝う。

姉に身を委ねる安堵が全身を包み込むと共に、少年期には無縁だった劣情が反り返る逸物をビクビクと震わせた。股間を野卑にひくつかせながら無邪気で幼き思い出を懐かしむ。

相反する欲望と想いが、駿一の胸中で奇妙な同居を果たしていた。

「優しくて懐かしい……姉さんの匂いだ」

小さい頃に鼻を擦った、由香菜の柔らかな香り。

当時は由香菜もまだ女子高生だったので香水を付ける機会は少なかったが、それでも母性を感じさせる優しい姉の匂いは不変のままだ。違いといえば、あの頃と違って脚肌へ無遠慮に鼻梁を擦りつけているだけに、濃密さにおいては比較にならない。

「どうせだから、ふとももの味も確かめるよ。いいよね、姉さん」

最初から回答の得られない許可を求め、魅惑のふとももに口付けする。パンティエストッキングを透かし、ナチュラルブラウンに透ける脚肌にキスをした。

ナイロンのサラリとした感触を唇で楽しみつつ、べったりと涎に濡れた舌を這わせる。微細な化繊の編み目に、乳頭が柔らかくに絡んだ。

魅惑のふとももから浮き出ていた汗を吸い込んでいたのだろう。輝糸のファンデーションからは、微かに甘いしょっぱさが感じられる。

「んっ……あ……」

ふとももの柔らかさを肌と舌で味わい、パンティエストッキングに溶け込んだ女の匂いに耽溺していると、再び由香菜が甘く轉る。一応姉の様子を確認するが、案の定女性の自律反応らしく由香菜の膺は開かない。

何度か手首を返してふとももへの愛撫を繰り返すと、桜唇が薄く開き切ない吐息が漏れた。

「姉さんの嬌声、もつと聞かせて」

耳朶を撫る妖しい音色が、駿一に新たな欲望を惹起させる。由香菜がどれだけ男の劣情を唆す身体の持ち主であるかは、長年にわたり同居しているので身に染みて理解している。

## タイトル

しかし、年の離れた姉がこんな可愛らしい艶声を奏でるなど、想像もできない。耳朶を這い鼓膜を舐める妖しくも甘い息遣いは、駿一を獣の昂ぶりへと駆り立てる。

「ああ……ん、う……」

懊悩をするまでもなく、牡の本能が駿一の指を支配していた。男を惑わす音色を奏でさせるため、楽器に見立てた女体にしつとりと指を這わせる。

「姉さんのエッチな吐息、身体がゾクツとするよ」

ふとももにキスをしながら膝裏を優しく撫でると、快感に煽られた魅脚が甘い苦悶に乱れた。女体が顕著なまでに愛撫へ反応を示し、駿一は胸中で喝采を挙げる。

（沙耶花だけじゃなくて、姉さんもちゃんと僕の前戯で感じてくれている）

彼女である女子大生は美少女であり、年の離れた姉は成熟した美女だ。それだけに、沙耶花に施していた淫戯が由香菜にも効果があるのか不安だったが、同じ女だけあって快楽のツボを押さえればちゃんと通じるらしい。

「寝ながらでもイクくらい姉さんの身体を気持ち良くしてあげるよ」

ふとももに預けていた頭を離し、代わりに掌を内腿へと滑らせる。女股に触れそうで触れないギリギリのラインをねつとりと撫でた。「んうっ」と甘く切ない悲鳴を由香菜に弾かせ、駿一は至極満足に頬を緩める。

未だ童貞の駿一だが女体を蕩かす前戯には自信がある。一向にセックスをさせてくれない沙耶花を陥落させるべく、あの手この手で女を気持ち良くする方法を研鑽したのだ。そうした甲斐あって、駿一は愛撫を施すだけで沙耶花の腰を融かし、キスを浴びせるだけで絶頂に至らせるまで前戯を上達させていた。

恋人の鋼鉄の如き貞操観念は現在に至るまで熔解していないが、そうした時代錯誤な抵抗もあって駿一は蜜戯の向上に努めている。

「沙耶花と同じで、普段触らないような箇所はとつても気持ち良いみたいだね」

欲望に駆られた痴漢染みた手付きではなく、女体に分布した性感帯を探り当てる愛撫で、今一度足指から魅臀までゆっくりと指紋を這わせる。

「あんっ…：…んんっ…：…」

顕著な反応があったのはふとももの内側だ。股座に近い脚肌をじっくり愛撫してやると、由香菜は熱く濡れた吐息を零し、快楽から逃げるように脚をずらす。

「ふあ…：…んんっ…：…」

サラサラと耳に心地良いパンティエストッキングの擦過音が、むっちりとした魅惑のふとももから紡ぎ出された。内腿を執拗に責めつつも、脚全体に広く愛撫を塗布していく。掌を己の舌に見立て、べっとりとした女の下半身を賞翫していると、やがて寝息に

## タイトル

混じっていた甘い音色が、徐々に頻度と密度を増していく。

快楽の塗布に耐えられなくなったのか、魅脚がもじもじと切なげに悶えた。

「ああ、姉さんの喘ぎ声、最高にエロいよ」

優しくおっとりとした姉が紡ぎ出す、耳を濡らす甘い淫鳴。喜悅の溶け込んだ由香菜の息遣いが鼓膜を悦ばせるたびに、脈拍が荒々しく昂ぶり牡の剛直がびくびくと卑しく嘔う。

意識を直に舐め取られるような甘い旋律が、再び鈴口からとろりと淡精を漏出させた。滴となった先走り汁が執拗なまでに長い水糸を引く。

「僕に撫でられるのが気持ちいいんだね。姉さんの身体から、エロい匂いが濃くなっているのがわかるよ」

脚線を席卷する愛撫が、女体を性悦に微睡ませているのだろう。深く穏やかだった由香菜の寝息は浅く短いものへと変化しており、緩やかに閉じられていた紅唇は薄く開いたままになっている。

微酔いの火照りとは色合いの異なる朱が姉の頬を染め、安眠に横たえられていた柳眉は甘い苦悶に歪んでいた。

雪肌にはんわりと浮かんだ女汗が、牡の情動を励起させるフェロモンを撒き散らす。

匂い立つ色気に焚き付けられ、欲望に炙られた肉傘がぐつと猥欲を広げた。

「ああ、姉さんの肌、とつても美味しいよ」

スカートの捲られ剥き出しとなった女腰。パンティストッキングの届いていない生肌にはほんの微かな汗が煌めいていた。

獣の如くべったりと舌を這わす。微かなしよっぱさを含んだ女の汗は揮発する前のフェロモンを濃密に含有しており、味蕾を通して駿一の脳裏をびりびりと痺れさせた。雪肌にとつとりと涎を塗布し、艶脂に埋まった尾骨に幾度となくキスを繰り返す。故意にちゅうちゅうと音を立てて女肌を啄み、きめ細かな肌を気泡混じりの涎でべつとりと穢れた涎に輝かせる。

「はっ……ああっ……」

決して姉に通じぬ想いを愛戯に込める。由香菜の白い喉が蠕動した。快楽に従順な女体は、もつと触れて欲しいとばかりに駿一の掌を内腿へと挟み込む。

意識が無い弊害故に、女体が脚を閉じる力には遠慮も加減もまったくくない。無理矢理ふとももの間から引き抜くわけにも行かず、駿一は股座の間に生じた逆三角形の空白に掌を滑り込ませる。

股座にまで手首が入り込み、女肌とは異なる薄布の感触が駿一の指に伝った。

## タイトル

（えっ……これって、もしかして——）

意図せず、パンティストッキングの上から撫でてしまった、純白のランジェリー。そのショーツから粘りを帯びた水気を感じ、駿一ははやる心を抑えて女脚に囚われていた手首を己の眼前に掲げた。

室内の照明を受け、ぬらりとした光が反射する。何か考えるよりも早く、濡れた指先を鼻先に近づけた。途端、目の前が歪むほどの淫香が駿一の氣道を灼く。

（濡れる……まさか姉さん——）

エクスタシーに達した沙耶花がショーツの内から漏らす、女の淫汁が脳裏に引き合いついて出される。

匂いの違いはあれど、牝の本能が女の発情の証を嗅ぎ間違えるはずがない。汗とは比べものにならない噓せ返るようなフェロモンは、自慢の美姉が牝の悦びに酔い痴れていると何よりも雄弁に語ってくれる。

（僕が……弟の僕が、姉さんのまんこを盛りせたなんて）

自分の愛撫には確たる自信があった。意識はなくとも、姉の女体に性悦を与えているという実感はあった。

それでも、目の前に明瞭な牝悦の証拠を見せ付けられた衝撃は計り知れない。

これが自分の妄想が生み出した幻影ではないと確認すべく、駿一は今一度震える指先を女の股座に突っ込んだ。隠された臀溪に沿って引かれたセンターシームに指を乗せ、そのまま化繊の軸を伝っていく。

女体の熱と湿気が濃くなったと感じた刹那、ぐちゅりと生温かいぬめりが指先を濡らした。

ゆっくりと手を引き抜き、手首を返して己の指先を改める。人差し指と中指の間に淫らな温もりを湛えた水系が幾本も張られていた。はしたない湯気が細く昇り、アルコールとも香水とも異なる淫靡な匂いがむわりと揮発する。

（これが姉さんの味……ああ、意識が傾きそうなエロい味だ）

堪らず指をしゃぶると、はしたない牝のフェロモンが溶け込んだ牝味が舌を爛れさせる。頬の粘膜を焦がすような、あまりにも媚色に染まった淫香が口腔に充滿した。

涎と掻き混ぜられても粘りを失わない愛液はべっとり舌肉に絡み、衝撃に等しい蠱惑が駿一の脳をぐらりと揺らした。

（姉さんが濡らしている……僕の指で、姉さんのまんこが——）

姉に語りかけることも忘れ、興奮の赴くままウエストテープに指をかける。更なる禁忌を犯そうとしている自分自身の行動すら、今の駿一には考えられない。性欲に理

## タイトル

性が踏みつけられ、獣のように口で息をする。

パンティストッキングと合わせて、ショーツが擦り降ろされていく。化繊に押し込められていた尻肉がぷにゅりと弾けた。魅臀をびったりと覆っていたランジェリーが剥がされ、きめ細かな臀肌と柔らかな肉谷が露わとなっていく。

「う、わ……」

無意識に、感嘆が喉を震わせる。ふとももに差し掛かるところまでショーツを引き下ろすと、股間とクロッチの間に幾つもの水系が張られた。その淫靡な光景が目には焼き付くのと時を同じくして、熱気の混じった愛汁の香りがむわりと立ち上る。

美しい姉が湧出させたとは到底思えない、獣染みた牝の発情臭。牝の理性を腐食させる牝臭が、駿一の陰囊を疼かせ勃起した淫根に邪な熱を煮え滾らせる。

自分の手で姉を女に堕としてしまったという、許されざる背徳の悦びが背筋をビリビリと戦かせた。

（姉さんのまんこが、僕の目の前に——）

彼女の許しを得られないが故に、未だネットを介してしか見たことの無かった、生の媚裂。それを、長年姉弟として過ごしてきた妙齡の美女が、愛液を滴らせながら駿一の目の前にさらけ出している。

由香菜が俯せになつていたので媚裂の全容こそ見えないものの、淫唇に囲われた女蜜を分泌し続ける秘穴はくつきりと見えた。

(これが姉さんの……セックスするための穴……)

憧れだった美姉の蜜穴を初めて的女性器として見る興奮。痛みを感じるほどに臉が開ききる。やけに耳障りな音が反響していたが、それが自分の鼻息によるものだと駿一には気付けない。

本능が促すままに、興奮に震える指先が媚穴へと伸ばされる。

(姉さんも、愛液を漏らすなんて)

駿一にとつて世界で一番美しく、優しい二十八歳の姉。姉と弟という断絶を余儀なくされる関係もさることながら、高嶺の花であった年上女が性悦によつて媚口を濡らしたという現実が、凄まじい劣情を駿一の股座に掻き立てる。

(指が止まらない……姉さんのまんこを弄りたい)

本来ならば、悩ましい艶脚に牡の精を撒き散らし、淫らな溜飲を下げなくてはならない。この背徳の遊戯は、もう許されない領域にまで踏み込んでしまっている。

それがわかっているのに、どうしても指が止まらない。美しい姉の恥部を暴く高揚もさることながら、女を知らない童貞の焦燥感が、余裕のない情動を盛んに急き立てる。

## タイトル

る。

「姉さん……痛くはない、よね」

媚唇を恐々となぞりながら、駿一は無意味に質疑する。女体を蕩かす前戯には自信があるものの、沙耶花が強く拒否していたこともあり、唯一女性器だけには直に見たことも触れたこともない。確たる知識と不確な情報のみがすべてであり、肝心の経験が欠落している。

万が一にでも由香菜を傷つけないよう慎重に慎重を重ねて秘唇をなぞり、蜜に溢れた襞を弄る。

手探りで媚裂に指を埋めると、「んっ」と美姉が艶めかしく鳴き、やわらかに盛り上がった臀丘がふるふると揺れる。

「ごめん、指が止まらないんだ」

極上の美女たる姉の媚肉を、弟の身でありながら触れられる暗い悦び。指先に纏わり付く媚襞を弄れば弄るほど、淫らな涎が女穴から垂れ流され劣情を唆す淫香が撒き散らされる。呼吸が苦しくなるにつれて狂おしい灼熱感が肺に籠もった。艶襞を掻き回す数に比例して、淫らな水音が駿一の抑制力を腐食させていく。

「えっ——」

本能の赴くまま、色欲に汚染された指先が由香菜の媚穴に潜り込む。しかし、指先の捉えた異物感がこれまで抑え付けられていた理性を僅かながら引き戻した。

(これって……いや、そんな……)

あまり自慢できることでは無いが、いつか沙耶花とセックスする日に備えていたため、駿一の性知識は豊富だ。当然、そこには女性器にまつわる内容も含まれており、彼女である沙耶花をリードするために処女膜と破瓜の情報も詰め込まれていた。

それだけに、蜜穴の入り口を著しく狭めている弾性の柔肉を指先に感じた瞬間、それが由香菜の処女膜であると直感的に把握できてしまった。

(姉さんには彼氏がいたのに……どうして)

姉が未通であったことに驚愕する横で、理性が何かの間違いだと繰り返す。実際、由香菜は過去何人もの男と付き合っている。どれも長続きしなかったようだが、これだけ美人の姉が性交渉を持っていなかったとは考えにくい。

そうした当然の前提を並べ立てるものの、指先に伝う生々しい純潔の証は否応にも駿一に信じ難い現実を突きつける。

(姉さんが本当に処女なら、これからセックスした男が姉さんの初めてを……)

蜜口から伝う感触が本当に処女膜なのか否かを見極めるより早く、おぞましいほど

## タイトル

邪な考えが迫り上がってくる。

由香菜の処女を奪いたい——弟として許されざる願望であり、牡としては至極当然に求める欲望。

初めての男として憧れの女の純潔を奪い取りたいと渴望するのは、牡に仕組まれた本能だ。

(もし、姉さんと童貞を捨てられたら——)

初恋の相手を抱き大人の男になる——野蛮な牡欲だけではなく、男が求めるロマンも平行して満たせる。獣の渴望と男の夢を、今ならば叶えられる。

こんな千載一遇のチャンスは、もう二度と無いだろう。

(姉さんに……そんな真似、できるわけない)

相手は敬愛すべき姉であり、駿一は単なる弟だ。由香菜の同意すら得ていないのだから、これではセックスではなくレイプにしかならない。

それに、駿一には沙耶花という彼女がいる。恋人に隠れて他の女を抱けば、明確な裏切り行為になるだろう。

最後の過ちを犯させまいと、倫理と道徳が牡の股間から膨張する獣欲を抑圧する。

(でも……もし、姉さんに新しい彼氏ができたとしたら——)

挙げ句、その男が由香菜を忌まわしいペニスで貫き、偉い処女を奪ったのだとしたら——そこまで想像したところで、猛烈な吐き気が喉元へと迫り上がってくる。

(冗談じゃない。僕の……僕だけの姉さんが……こんな大好きな姉さんが穢されるなんて、絶対に認められない。許せるもんか)

まるで、目の前で彼女を寝取られるような絶望感。愛する姉が顔もわからぬ男に肌を許し、純潔を穢されたと妄想するだけで、臓腑を掻き混ぜられるに等しい嫌悪感が腹の中で渦巻く。敬愛する姉が奪われる惨苦に、脳の神経が千切れんばかりに頭蓋が痛み、心が軋みの慟哭をあげる。

初めて好きになった女が処女を護っていた——その知られざる事実を見た駿一は、もう弟として甘んじることができなかつた。

(他の男に犯される前に……僕が最初に姉さんを穢してやる)

愛情と欲望が、胸の中で混濁する。暴走した独占欲と支配欲が、純粋なまでの強姦願望を焚き付ける。

レイプに及べば由香菜が目覚めるであろう懸念など、歯牙にもかけない。童貞の卑樹で姉の純潔を奪い穢す潜在一隅のチャンスが、理性を完全に狂わせていた。

「姉さん。僕のちんぼで、処女のまんこをぶち破ってやるからね」

## タイトル

低く、それでいて狂熱を帯びた宣告を残し、駿一はゆつくりと由香菜へとのし掛かっっていく。裏筋を張らせた男根は亀頭冠が下腹に接するまで反り返り、鈴口から垂れて精囊を伝った先走り汁が、豊臀にねっとり垂れた。艶やかな尻肌に付着した淡精が、どろりと穢れた光沢を放つ。

女体の脇に両腕を立て、背を僅かに反らせる。性交の経験は皆無だが、大きさには揺るぎない自信を持つ逸物。巨根と称するにいささかの語弊もないペニスを、ゆつくりと降下させていく。男の下腹と女の尻朶が接した後、左手で身体を支えながら右手を一時的に下げ、水平になっている肉槍を押し下げる。

ほんの微かに腰を前に突きだしてから位置調整していたペニスから手を離すと、まるで精密に計算されていたように、再び反り返った亀頭端が蜜口へと潜り込む。

「犯すよ、姉さん」

ベッドシートに当てた掌に力を込め、駿一はゆつくりと股間を埋めていく。すぐにふやけた蜜肉とは異なる、狭隘な肉丘があからさまに男根の侵入を阻害するが、蒼欲に狂った若い牡に躊躇いはない。

「んっ……あっ……」

しとどに股座を濡らしていても痛覚は麻痺してないらしく、由香菜の寝息が苦しげ

に乱れる。柳眉が酷く歪み、黒艶に溢れる睫に漣が立つものの、眠りが深い由香菜はこの期に及んでもまだ目を覚まさない。

その悪運に乗じ、駿一はいきり立った淫杭を力強く沈み込ませた。

「姉さんの純潔、僕のちんぼで食ってあげるからね」

膨張した鈴肉が、みちみちと処女膜を引き裂いていく。窮屈な蜜洞に精幹をめり込ませ、力尽くで破っていく感触が牡柱にじくじくと染みこんでいく。清逸な膜肉を散らしていく恍惚と感動が、淫茎を極限まで張り詰めさせた。(体験版終了)